

親鸞の祖師観について

川 添 泰 信

一 問題

親鸞の祖師観について考察をおこなう場合まず最初に考えられるのは、そこに二つの立場があるということである。すなわち一つは「見る立場」であり、それは「行巻」「信巻」さらには「和讃」等に見られる浄土教者であり、七祖である。さらにいま一つは「見られる立場」である。それは妻、

恵信尼が、「さて又一たいはと申せば、あれはくわんおんにてわたらせたまひし、あれこそぜんしんの御房よ」と、ぜん

しん、すなわち親鸞を観音と見ていたものである。親鸞についてはこのように二つの立場があるとみられるが、ここで問題にするのはこの二つの立場のなか「見る立場」である。ところでこの「見る立場」にはさらに二つの視点があるように思われる。すなわち一つは(A)「御同行・御同朋・とも同朋」とよばれた視点であり、また一つは(B)「祖師観」としてみられた視点である。(A)は法然門下、および関東の

人々を指していわれたものであり、(B)は先の浄土教者、ならびに具体的には七祖についていわれたものである。ここで注意をしたいのは、親鸞は(B)について(A)の呼び方はされなかったということであり、基本的には(A)と(B)の見方は異なっているということができであろう。そこで本論では問題を絞り、(B)の「祖師観」のなか親鸞にとって面授の師であった法然を取り上げた。

親鸞の法然に対する見方は、親鸞の念仏信心の出発の時点

を明かす『恵信尼文書』に、

しやうじいづべきみちをば、ただ一すぢにおほせられ候しを、うけ給はりさだめて候しかば、しやうにんのわたらせ給はんとところには、人はいかにも申せ、たとひあくだうにわたらせ給べしと思とも、せゝしやうじやうにもまよひければこそありけめとまで思いまいらするみなればと、やう／＼やうに人の申候し時もおほせ候しなり(定親全三卷一八八頁)

と示され、さらには親鸞自らの記述として「化巻」には悲喜

の涙を抑えて『選択集』の書写・法然の真影の図画等の由来の縁が述べられている。さらに晩年になると消息等には「故法然上人のおおせには」〔『末灯鈔』真聖全二巻六六五頁〕と、別離後半世紀を経てなお法然への傾倒が述べられているのである。そしてこのような親鸞の思いは端的には唯円の記した『歎異抄』に、

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられひまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。……たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ云云（真聖全二巻七七四頁）

といわれるように、法然を「よきひと」と呼び絶対帰依の態度を堅持しておられるのである。しかしながら、親鸞の法然に対する見方については今日の我々からみると、ただちに容易に領解しがたい側面を持っているようにも思われるのである。そこで親鸞は法然をどのようにみていたのか、さらには絶対帰依の根源にはどのような祖師観があったのか、等について考察を試みたい。

二 親鸞の法然観の分析

親鸞の法然に対する見方についてはおおよそ二つの点があるように思われる。すなわち（イ）念仏信心にもとづく法然

観、（ロ）讃嘆にもとづく法然観である。まず第一の（イ）念仏信心にもとづく法然観であるが、それは「行巻」に『選択本願念仏集』に源空集云く 南無阿弥陀仏 往生の業は念仏を本とすると……（真聖全二巻三三三頁）といわれるものであり、さらには「正信偈」には「本師源空は仏教を明らかにして、善惡の凡夫を憐愍せしむ。真宗の教証片州に興す……」（真聖全二巻四四四頁）と明かされるものである。そしてさらに

「化巻」後序には「然るに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、難行を棄てて本願に帰す。……『選択本願念仏集』は……真宗の簡要、念仏の奥義、これに撰在せり」（真聖全二巻二〇二頁）と述べられるものである。さらにはまた『尊号真像銘文』末には「日本源空聖人真影……」（真聖全二巻五九三頁）として法然の念仏の主張が略説され、そして「和讃」には「諸仏方便ときいたり 源空ひじりとしめしつ 無上の信心おしえてぞ 涅槃のかどをばひらきける」（真聖全二巻五一四頁）、「真の知識にあふことは かたきがなかなをかたし 流転輪廻のきはなきは 疑情のさはりにしくぞなき」（真聖全二巻五一四頁）等と、法然がいかに念仏信心の教えを強調し説示したか、述べられるのである。

そしていま一つは（ロ）讃嘆にもとづく法然観である。この讃嘆による法然観についてはそのなかを三つに分けて見ることができるようである。すなわち、（一）開宗の功の讃嘆、

(一) 本地垂迹の徳の讃嘆、(二) 瑞相の徳の讃嘆である。まず最初に(一)の開宗の功の讃嘆であるが、それは「和讃」に「本師源空世にいでて 弘願の一乗ひろめつつ 日本一州ごとごとく 浄土の機縁あらはれぬ」(「高僧和讃」法然讃第一〜第四首、真聖全二卷五二頁)等に見られるものである。また(二)の本地垂迹の徳の讃嘆は、それは「本師源空の本地をば 世俗のひとびとあひつたへ 綽和尚と称せしめ あるひは善導としめしけり」(「高僧和讃」法然讃、真聖全二卷五三頁)や「源空勢至と示現し あるひは弥陀と顯現す 上皇群臣尊敬し 京夷庶民欽仰す」(「同」第五十首、真聖全二卷五一三頁)等と明かされるものであり、さらには『西方指南抄』に「藏俊云く、汝まさにただ人にあらず、権者の化現なり、智慧深遠なること形相炳焉なり」(定親全五卷一七六頁)、「源空聖人、実は弥陀如来の応跡かと定め了ぬ」(同一八二頁)、「聖人、月輪殿に参上したまふ、退出のとき、地より上高く蓮華を踏みて歩きたまふ、頭光赫奕たり、およそは勢至菩薩の化身なりと」(同一八三頁)、「園城寺の長吏法務の大僧正公胤、法事の為にこれを唱導する時、其の夜夢に告げていわく。源空為教益 公胤能說法 感即不可盡 臨終先迎撰 源空本地身 大勢至菩薩 衆生教化故 来此界度 此の故に勢至来見を大師聖人と名づく。このゆえに勢至を讃めて言はまく。無辺光、智慧光を以て一切を照らす故に、聖人を嘆じて智

慧第一と称す。碩徳の用をもて七道を潤すがゆえなり。勢至を動かして済度の使いと為したまえり。善導聖人を遣わして順縁の機を整えたまえり」(同一八六頁)等と述べられているものである。そして最後に(三)の瑞相の徳の讃嘆は、それは「本師源空のおほりには 光明紫雲のごとくなり 音楽哀婉雅亮にて 異香みぎりに映芳す」(「高僧和讃」法然讃第十三〜第二〇首、真聖全二卷五一四頁)等と示されるものである。

三 親鸞の法然観の問題

親鸞の法然観のなか讃嘆にもとづくものについて(一)の開宗の功によるものは事実、法然によって従来、寓宗的立場にあった念仏信心の教えが真に独立し、そして広く日本各地に受容されていったことを考えるならば当然の讃嘆であるともみることができであろう。しかし(二)の本地垂迹にもとづくもの、(三)の瑞相にもとづくものについてはどうであろうか。もちろん高僧と呼ばれる人に対してこのように仏や菩薩の化身であり、また臨終にさいして奇瑞が語られるのは中国以来の高僧伝にも見られるものである。法然の編集した『類聚浄土五祖伝』のなか、第六伝の『龍舒浄土文』のなかには「慈雲式懺主略伝に云、阿弥陀仏の化身なり」(昭法全八五三頁)といわれている。それを受けて法然は『選択集』に「大唐の相伝にいわく善導はこれ弥陀の化身なりと」(真聖

全一卷九九三頁」と示しているのである。また瑞相についても同じく『類聚浄土五祖伝』の善導伝の『新修往生伝』には「怡然として長逝す、春秋六十九。身体柔軟にして、容色常の如し、異香音楽久にして方につきぬ」（昭法全八五三頁）と明かされているのである。このように法然は伝記にしたがって善導を弥陀の化身とし、またその瑞相を述べているのである。親鸞はこの法然の見方にもとづき、直接的な対象は法然は善導、親鸞は法然と異なっているもの、その理解は同一の視点に立っているということができようであろう。それは立場を異にした慈円とはおおいに異なるものであり、慈円の『愚管抄』には「往々」と云なして人あつまりけれど、さるたしかなる事もなし」（日本古典文学大系八六卷二九五頁）と法然の往生に際して極めて客観的にみているのである。

ではこのような本地垂迹的な弥陀化身観や瑞相観は単に伝記や風説にのみもとづいているものであろうか。確かに伝記や風説にもとづいているものであることは否定できない事実であろうが、いま一つ注意をしたいのは、そのような伝記や風説を受け入れた基底は何であったのであろうかということである。それは言うまでもなく全般的には法然によって教示された「親鸞の法然観の分析」のなかの（イ）の「念仏信心にもとづく法然観」の理解によるものであるということができようが、よりの確には『歎異抄』第二章の説示の理

解のなかに見ることができないかと思われる。すなわち、

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとらんや、法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか（真聖全二卷七四頁）

である。この説示は弥陀↓釈迦↓善導↓法然↓親鸞の方向において述べられている。それは超歴史的な弥陀の本願と、歴史的な釈迦・善導・法然・親鸞とに区別することのできるものであるが、その意味するところは超歴史的な弥陀の本願は釈迦を通じて歴史的に開示され具現化されたということであり、このことは善導・法然・親鸞についても同一であるということであろう。とするならば、法然にとって善導は弥陀の本願を明かすものとして、それは弥陀の化身と見られ、また親鸞にとって法然は同じように弥陀の本願を説くものとして法然は弥陀の化身なのである。このことを親鸞自身の立場から明かすのが、「弟子」という言葉であろう。すなわち「信巻」には

真仏弟子というのは、真の言は偽に對し仮に對するなり。弟子とは釈迦諸仏の弟子なり。金剛心の行人なり。この信行によって必ず大涅槃を超証すべきがゆえに、真仏弟子という（真聖全二卷七五頁）

と明かされている。先の弥陀の化身の理解からいうなら、ここでいわれる諸仏とは親鸞にとっては念仏信心を説いてきた浄土教者であり、七祖の祖師方なのである。そしてより具体的には直接教授された法然こそ諸仏そのものであったのではないであろうか。いわば念仏信心を説き、そして自らをその念仏信心の世界に導いたその人こそ弥陀の化身であり、また諸仏なのである。このような理解から親鸞は「和讃」等に伝記や風説にもとづく弥陀化身観や瑞相観を受容し、法然の徳を讃嘆したのであるということができるとであろう。

したがって親鸞の法然観のなか、弥陀化身観や瑞相観は単に伝記や風説を受容して述べられたということではなく、それは親鸞にとって法然が化仏・諸仏と理解されていたことか
らいうなら、親鸞にとって伝記・風説の法然像は法然その人をそのまま明かしたものである。このような意味において、親鸞においては伝記や風説の記述は積極的に受容され、そしてそれが讃嘆の表現として明かされたのであるということができないかと思われる。

(註記略)

△キーワード▽ 親鸞、念仏信心、讃嘆

(本願寺派宗学院研究員)

会員資格に関する内規

一、会員は原則として新制大学又は短期大学卒業以上、あるいはそれに相当する学力を有する者とする。入会に当っては学会役員(理事又は評議員)一名の推薦を得た上、理事会の承認を必要とする。

二、学術大会における発表資格者は、原則として新制大学院修士課程修了以上、又はそれに相当する学力を有する者とする。

三、会費を三年間滞納した者は退会したものと認める。又、会の名誉を著しく害なう等会員として不適當と認められる者については、理事会の決定により除名することができ。